

『アラブる♥プリンス』

著: 神香うらら

ill: こうじま奈月

——歩貴の住む大(だい)黒(こく)荘(そう)は、住宅街の外れの板(ばん)金(きん)工場の裏手にある。

今どき珍しい平家建ての長屋で、一号室から三号室まで三戸あるのだが、築年数不明の超アンティークな物件ゆえ借り手がなく、現在入居しているのは一号室の歩貴だけである。

(なんか妙なことになっちゃったな……)

筆

(たん)筈(す)の引き出しの中から男のサイズに合いそうな着替えを探しながら、歩貴はため息をついた。

——橋の下で、アラブ服の外国人の男を拾ってしまった。

訳(わけ)ありらしい人物を家に招(まね)き入れるのは、本音を言えばやはり抵抗がある。

(うう、俺ってほんとお人好(よし)

小学校のときに、公園で仔(こ)犬(いぬ)を拾って帰ったときのことを思い出す。つぶらな瞳に見上げられ、ペットを飼うことができないとわかっているのに、連れて帰らずにいらなかった。

幸いそのときの仔犬は飼ってくれる人が見つかったのだが……。

「これでいっか。つーか、これしか着られないよな」

新品のジャージの上下セットを見つけて広げる。部屋着にしようと思って商店街のワゴンセールで買ったものの、歩貴にはサイズが大きすぎて持てあましていた物だ。

ジャージとバスタオルを持って、裏庭に通じるガラスの引き戸を開ける。

大黒荘はちょっと変わっていて、裏庭に住人用の共同風呂があるのだ。

その昔、大黒荘の住人は近所の銭(せん)湯(とう)を利用していた。時代の移り変わりとともに銭湯が姿を消し、やむを得ず共同風呂を増設したと聞いている。他に入居者がいないのでひとりで自由に使えるのはいいが、雨の日も寒い日も一旦外に出なくてはならないのが難点だ。

「あの一、ここに着替え置いときますね」

プレハブ小屋のドアを開け、浴室にいる男に声をかける。

「ああ」

湯気で曇ったガラス戸の向こうから、男が鷹(おう)揚(よう)に返事をする。

脱衣室の床に、雨に濡れた服が無造作に脱ぎ捨ててあった。歩貴の部屋には洗濯機がないので、あとでコインランドリーに行って乾かしてやらねばなるまい。

(あ、雨やんでる)

ドアを閉めて外に出ると、ついさっきまでぱらついていた雨がやみ、西の空がほんのりと夕焼けに染まっていた。

男が風呂から上がった怪(け)我(が)の手当てもしてやらねば、と、母(おも)屋(や)に

戻って救急箱を探す。

押し入れの中から救急箱を発掘したところで、引き戸ががらりと開いて男が入ってきた。

「うわあっ！」

振り返って、歩貴は思わず大声を上げた。

男が、一糸まとわぬ姿で現れたのだ。

「なっ、なんで裸!? 着替え置いといたでしょう!?!」

がっしりした肩や厚い胸板、ちらりと目に入ってしまった黒々とした繁(しげ)みに、慌てて目を逸らす。

浅黒い肌と盛り上がった筋肉がなんとも色っぽく、脚(あし)の間には立派なものが重たげに揺れていて……。

(うわ、ざ、残像が目に焼き付いてる……っ！)

目を閉じて、一度見てしまった衝撃の裸体像は消えなかった。

目の前にちかちか飛び散る火花を振り払い、畳(たたみ)に手をついて肩で息をする。

「着替えというのはこれか」

男が手にした臙(えん)脂(じ)色(いろ)のジャージを見下ろし、眉をひそめた。

「まっ、まず前を隠してください！」

「ああ……」

男がようやく気づいたように、手に持ったジャージで前を覆った。

「えーと……サイズが合わなかったですか？」

「この色は嫌いだ」

「……………は!?!」

男のセリフに、歩貴は目を見開いた。

冗談を言っているのかと思ったが、男は至って真面目な表情だ。

息を吸って気持ちを落ち着かせ、ゆっくりと口を開く。

「……あなたのサイズに合いそうな服は、うちにはそれしかないんですけど」

「この色は着たくない」

呆(あっ)気(け)にとられて、歩貴はまじまじと男の顔を見つめた。

(この色は着たくない……?)

確かにワゴンセールジャージはお洒落(しゃれ)とは無縁の色とデザインだ。しかし、まさか服の色について文句を言われるとは思わなかった。

「じゃあ着てきた服、着ますか？」

むっとして言い返すと、男もむっとしたように唇をへの字に曲げる。

不満そうにされても、他に着られるものはないのでこれで我慢してもらうしかない。

歩貴がぐるりと背を向けて無視していると、男がため息をつきながらジャージを着る気配がした。濡れた服よりはましたと諦めたのだろう。

「水を一杯くれ」

「……どうぞ！」

背中を向けたまま、びしっと台所を指さす。水ぐらい汲(く)んでやってもいいのだが、ジャージに文句を付けられたばかりで歩貴も気が立っていた。

男が流しの水切りかごに伏(ふ)せてあったグラスを手に取り、蛇(じゃ)口(ぐち)から水を汲んで一気に飲み干す。

ちらりと見やると、ジャージはかなりきつそうだった。ズボンの丈(たけ)は足りないし、広い肩の辺りはいかにも窮(きゆう)屈(くつ)そうに布地が伸びている。

(うーん……これを着させるのはちょっと気の毒だったか)

上着の前のファスナーが閉まり切らなくて、ぱんと張り詰めた胸(きょう)筋(きん)が覗いている。

男っぽい胸板(むね)にどきりとして、歩貴は目を逸らした。

「……傷、大丈夫ですか？」

陰悪な態度になってしまったことを反省し、卓(ちゃ)袱(ぶ)台(だい)の前に座って救急箱から消毒薬を取り出す。

男も歩貴の隣にどっかりと胡座(あぐら)をかき、ジャージの袖を捲(ま)って卓袱台の上に右腕を差し出した。

幸い傷口は思ったほど深くなかった。これなら数日で塞(ふさ)がるだろう。

傷の手当てをしながら、歩貴は男のがっちりとした腕と大きな手に見入ってしまった。

(うーん、これぞ男の手って感じ。なんかもう、基本的に体格が違うんだなあ)

まるで彫刻のように美しい造形だ。消毒薬が沁(し)みるのか、男の指が時折ぴくりと反応する。

「まだ名前を聞いていなかったな」

ふいに男に話しかけられ、長い指に見とれていた歩貴は顔を上げた。

「えっ、あ、栗原歩貴です」

「アユキというのか」

そう言ったきり、男が黙(も)り込む。

(……ちょっと待て。俺にだけ自己紹介させといて、自分はだんまりかよ?)

少々むっとして、「お名前は？」と尋ねる。

男が一瞬面食らったような表情を見せ——まるで自分に名前を尋ねる人間などこの世にいないかのように——ふっと口元に笑みを浮かべた。

「アシュラフだ」

「アシュラフさん……ですか」

疑(う)わしげな眼差しで、歩貴はアシュラフと名乗った男を見上げた。

多分偽名(いつはり)だろう。しかし、それについてとやかく言う気はない。

雨もやんだし、傷の手当てをして服を乾(ぬ)かしたらアシュラフとはお別れだ。それ以上歩貴にできることはないし、関わりたくもない。

「あの、俺(おれ)んち洗濯機(せんたくき)がないんです。近くにコインランドリーがあるので、あなたの服を洗って乾(ぬ)かしましょう」

「いや、あの服(ふく)は処分(しぶん)する。さすがにあの服(ふく)でうろつくと目立つからな」

アシュラフが何者かに追われていることを思い出し、歩貴はごくりと唾(つよ)を飲み込んだ。

対照的に、アシュラフはリラックスした様子だった。傷口をガーゼで押さえながら、物珍(ものぢ)しげに室内を見回している。

間取りは2DK。六畳(むすま)の和室(わむろ)二間に三畳(さんじやう)ほどの台所があり、新築物件に比べれば広めだが、とにかく古い。整理整頓(せいりせいとん)は行き届(いた)っているものの、冴(さ)えない色の砂壁(すなかべ)や板張り(いたばり)の天井(てんじやう)、黄ばんだ襖(ふすま)など、どうしてもみすぼらしい印象(いんさう)が拭(ぬ)ぐえない。

(そういえば、うちに誰か連れてきたのって久しぶりだな)

大学に入学して初めてできた友人を招いたところ、あまりの貧乏っぷりにどん引きされてしまい、以来人を招くことを躊躇(ちゆう)躇(ちよ)するようになった。

「お腹(なか)は大丈夫？」

救急箱を片付けながら問いかける。

「お腹？」

アシュラフが不思議そうに問い返す。

「さっき、殴られたって……」

アシュラフがしていたのと同じように腹を押さえる仕(し)草(ぐさ)をすると、アシュラフが「ああ」と大きく頷いた。

「それならもう大丈夫だ。なんともない」

「そう……よかった」

話しながら、歩貴はアシュラフがいつこうに出ていく素振りを見せないことが気になり始めていた。

「あっ、雨、やみましたね！」

わざとらしく明るい声で言いながら、窓の外を指さす。

「そうだな」

にっこりと微(ほほ)笑(え)んで、アシュラフが頷く。

「……えーと、その服は返さなくていいですよ。俺にはちょっとサイズが大きすぎて着られないから」

「そうか」

遠回しに「雨もやんだし、服は差し上げるのでそろそろ帰ってくれ」と言ったつもりだったが、アシュラフは微動だにしない。

会話がそこで途切れてしまい、歩貴は困惑して視線を泳がせた。

残念ながら、アシュラフはこちらの気持ちを察してくれるタイプではなさそうだ。

(まさか……まさか今夜泊まるとか言わないよな？)

本文 p87～93 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>